

# 袈裟と盛遠

芥川龍之介

青空文庫



上

夜、盛もりとお遠とほが築ついで土じの外の外で、月つき魄しろうを眺ながめながら、落おち葉ばを踏ふんで  
物思ものいに耽たつている。

## その独白

「もう月の出でだな。いつもは月つきが出るのを待まちかねる己おれも、今日けふばかりは明あくなるのがそら恐おそしい。今いままでの己おれが一夜いちやの中うちに失うわ  
れて、明日あすからは人殺ひところもになり果はてるのだと思おもうと、こうして

も、体が震えて来る。この両の手が血で赤くなつた時を想像して見るが好い。その時の己は、己自身にとって、どのくらい呪わしいものに見えるだろう。それも己の憎む相手を殺すのだったら、己は何もこんな心苦しい思いをしなくてもすんだのだが、己は今夜、己の憎んでいない男を殺さなければならぬ。

己はあの男を以前から見知っている。渡左衛門尉と云う

名は、今度の事に就いて知つたのだが、男にしては柔すぎる、色の白い顔を見覚えたのは、いつの事だかわからない。それが袈裟の夫だと云う事を知つた時、己が一時嫉妬を感じたのは事実だつた。しかしその嫉妬も今では己の心の上に何一つ痕跡を残さないで、綺麗に消え失せてしまつている。だから渡は己にとって、

恋の仇かたきとは云いながら、憎くもなければ、恨めしくもない。いや、むしろ、己はあの男に同情していると云つても、よいくらいだ。

衣ころもがわ川がわの口から渡が袈裟を得るために、どれだけ心を労したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛かわゆく思つた事さえある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云う事ではないか。己はあの生真きまじめ面目な侍の作つた恋歌れんかを想像すると、知らず識らず微笑が唇に浮んで来る。しかしそれは何も、渡を嘲あざける微笑ではない。己はそうまでして、女に媚こびるあの男をいじらしく思うのだ。あるいは己の愛している女に、それほどまでに媚こびようとするあの男の熱情が、愛人たる己にある種の満足を与えてくれるからかも知れない。

しかしそう云えるほど、己は袈裟を愛しているだろうか。己と袈裟との間の恋愛は、今と昔との二つの時期に別れている。己は袈裟がまだ渡に縁づかない以前に、既に袈裟を愛していた。あるいは愛していると思っていた。が、これも今になって考えると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたのか、童貞だった頃の己は、明らかに袈裟の体を求めていた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に対する愛なるものも、実はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかった。それが証拠には、袈裟との交渉が絶えたその後の三年間、なるほど成程己はあの女の事を忘れずにいたにちがいないが、もしその以前に己がああ女の体を知っていたなら、それでもやはり忘れずに思い

つづけていたであろうか。己は恥しながら、然りと答える勇氣はない。己が袈裟に対するその後の愛着の中には、あの女の体を知らずにいる未練みれんがかなり混っている。そうして、その悶々もんもんの情を抱いだきながら、己はどうとう己の恐れていた、しかも己の待つていた、この今の関係にはいつてしまった。では今は？ 己は改めて己自身に問いかけよう。己は果して袈裟を愛しているだろうか。が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌いやでもこう云ういきさつを思い出す必要がある。——渡辺の橋の供養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇った己は、それからおよそ半年ばかりの間、あの女と忍び合う機会を作るために、あらゆる手段を試みた。そうしてそれに成功した。いや、成功したばかりではない、その時、

己おれは、己が夢みていた通り、袈裟けさの体を知る事が出来た。が、當時の己を支配していたものは、必しも前に云った、まだあの女の体を知らないと言う未練ばかりだった訳ではない。己は衣ころも川がわの家で、袈裟と一つ部屋の畳へ坐った時、既にこの未練がいつか薄くなっているのに気がついた。それは己がもう童貞でなかつたと云う事も、その場になつて、己の欲望を弱める役に立つたのであろう。しかしそれよりも、主おもな原因は、あの女の容色が、衰えていると云う事だった。実際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一体に光沢つやを失つて、目のまわりにはうす黒く暈かきのようなものが輪どつている。頬のまわりや顚あごの下にも、以前の豊かな肉付きが、嘘のようになくなってしまった。僅わずかに変らないもの

と云つては、あの張りのある、黒瞳くろめがち勝な、水々しい目ばかりであらうか。——この変化は己の欲望にとつて、確かに恐しい打撃だった。己は三年ぶりで始めてあの女と向い合つた時、思わず視線をそらさずにはいられなかつたほど、強い衝動を感じたのを未いまだにはつきり覚えてゐる。……

では、比較的そう云う未練を感じていない己が、どうしてあの女に関係したのであらう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向い合つてゐると、あの女が夫の渡わたるに対して持つてゐる愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしてもある空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に対して虚栄心を持つてゐる。」——己はこう考えた。「あるい

はこれも、己の憐憫れんびんを買いたくないと云う反抗心の現れかも知れない。——己はまたこうも考えた。そうしてそれと共に、この嘘うそを暴露ばくろさせてやりたい気が、刻々に強く己へ働きかけた。ただ、何故なぜそれを嘘だと思つたかと云われれば、それを嘘だと思つた所に、己の己惚うぬぼれがあると云われれば、己には元より抗弁するだけの理由はない。それにも関らず、己はその嘘だと云う事を信じていた。今でも猶信なおじている。

が、この征服心もまた、当時の己を支配していたすべてではない。そのほかに——己はこう云つただけでも、己の顔が赤くなるような気がする。己はそのほかに、純粹な情欲に支配されていた。それはあの女の体を知らないと言ふ未練ではない。もつと下等な、

相手があの女である必要のない、欲望のための欲望だ。恐らくは傀儡くわいの女をかう男でも、あの時の己ほどは卑しくなかつた事であらう。

とにかく己はそう云ういろいろな動機で、とうとう袈裟と関係した。と云うよりも袈裟はすかしを辱めた。そうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、——いや、己が袈裟を愛しているかどうかなどと云う事は、いくら己自身に対してでも、今更改めて問う必要はない。己はむしろ、時にはあの女に憎しみさえも感じている。殊に万事が完おわつてから、泣き伏しているあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥はれんちの己よりも、より破廉恥な女に見えた。乱れた髪のかかりと云い、汗ばんだ顔の化粧けしやうと云い、一つ

としてあの女の心と体との醜さを示していないものはない。もしそれまでの己があの子を愛していたとしたら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまったのだ。あるいは、もしそれまでの己が<sup>おれ</sup>あの子を愛していなかったとしたら、あの日から己の心には新しい憎み<sup>にくし</sup>が生じたと言つてもまた差<sup>さしつか</sup>支えない。そうして、ああ、今夜己はその己が愛していない女のために、己が憎んでいない男を殺そうと云うのではないか！

それも<sup>まった</sup>完く、誰の罪でもない。己がこの己の口で、公然と云い出した事なのだ。「渡<sup>わたる</sup>を殺そうではないか。」——己があの子の耳に口をつけて、こう囁<sup>ささや</sup>いた時の事を考えると、我ながら気が違つていたのかとさえ疑われる。しかし己は、そう囁いた。囁くま

いと思いながら、齒を食いしばつてまでも囁いた。己にはそれが  
 何故なぜ囁きたかつたのか、今になつて振りかえつて見ると、どうし  
 てもよくわからない。が、もし強いて考えれば、己はあの女を蔑さげす  
 めば蔑むほど、憎く思えば思うほど、益々何かあの女に凌りようじよく辱  
 を加えたくてたまらなくなつた。それには渡左衛門尉わたるさえもんを、  
 袈裟けさがその愛を銜てらつていた夫を殺そうと云うくらい、そうし  
 てそれをあの女に否いやおう応なく承諾させるくらい、目的に協かなつた事  
 はない。そこで己は、まるで悪夢に襲われた人間のように、した  
 くもない人殺しを、無理にあの女に勧めたのであろう。それでも  
 己が渡を殺そうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後あとは人間  
 の知らない力が、(天魔波旬てんまはじゆんとでも云うが好い)己の意志を

誘つて、邪道へ陥れたとでも解釈するよりほかはない。とにかく、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟の耳に囁いた。

すると袈裟はしばらくして、急に顔を上げたと思うと、素直に己の目ろみに承知すると云う返事をした。が、己にはその返事の容易だったのが、意外だったばかりではない。その袈裟の顔を見ると、今までに一度も見えなかつた不思議な輝きが目に宿つている。姦婦——そう云う気が己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の眼の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫りがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでいた事は、元よりわざわざ云う必要もない。もし出来たなら、その時に、己は己の約束をその場で破つてしま

いたかった。そうして、あの不貞な女を、辱しめと云う辱しめの  
どん底まで、つき落してしまいたかった。そうすれば己の良心は、  
たとえあの女を弄もてあそんだにしても、まだそう云う義憤うしろの後に、避難  
する事が出来たかも知れない。が、己にはどうしても、そうする  
余裕が作れなかった。まるで己の心もちを見透みとおしでもしたように、  
急に表情を変えたあの女が、じつと己の目を見つめた時、——己  
は正直に白状する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結  
ぶような羽目はめに陥つたのは、完まったく万一己が承知しない場合に、袈  
裟が己に加えようとする復讐ふくしゅうの恐怖からだつた。いや、今で  
も猶なおこの恐怖は、執念深く己の心を捕えている。臆病おそれだと晒わらう奴  
は、いくらでも晒わらうが好いい。それはあの時の袈裟を知らないもの

のする事だ。「己おれわたるが渡を殺さないとすれば、よし袈裟けさ自身は手を下さないにしても、必ず、己はこの女に殺されるだろう。そのくらいなら己の方で渡を殺してしまつてやる。」——涙がなくて泣いているあの女の目を見た時に、己は絶望的にこう思った。しかもこの己の恐怖は、己が誓せいごん言をした後あとで、袈裟が蒼白い顔に片か鬢たえくぼをよせながら、目を伏せて笑つたのを見た時に、裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪のろわしい約束のために、汚けがれた上にも汚れた心の上へ、今また人殺しの罪を加えるのだ。もし今夜に差迫つて、この約束を破つたなら——これも、やはり己には堪えられない。一つには誓せいごん言の手前もある。そうしてまた一つには、——己は

復讐を恐れると云つた。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？ この己を、この臆病な己を追いやって罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？ 己にはわからない。わからないが、事によると——いやそんな事はない。己はあの女を蔑さげすんでいる。恐れている。憎にくんでいる。しかしそれでも猶なほ、それでも猶、己はあの女を愛しているせいかも知れない。

。

盛遠もりとお

は徘徊はいかいを続けながら、再び、口を開かない。

月明つきあかり。

どこかで今いま様ようを謡うたう声がする。

げに人間の心こそ、無明むみょうの闇くらも異ことらね、

ただ煩惱ぼんのうの火と燃えて、消ゆるばかりぞ命なる。

下

夜、袈裟けさが帳ちようだい台の外で、燈台の光に背そむきながら、袖を嚙んで物思いに耽たっている。

その独白

「あの人は来るのかしら、来ないのかしら。よもや来ない事はあ  
るまいと思うけれど、もうかれこれ月が傾くのに、足音もしない  
所を見ると、急に気でも変ったではあるまいか。もしひよつとし

て来なかつたら——ああ、私はまるで傀儡くぐつの女のようにこの恥しい顔をあげて、また日の目を見なければならぬ。そんなあつかましい、邪よこしまな事がどうして私に出来るだろう。その時の私こそ、あの路ばたに捨ててある死体と少しも変りはない。辱はずかしめられ、踏みにじられ、揚句あげくの果にその身の恥をのめめと明るみに曝さらされて、それでもやはり唾おしのように黙おつていなければならぬのだから。私は万一そうなつたら、たとい死んでも死にきれない。いや、いや、あの人は必ず、来る。私はこの間別れ際に、あの人の目を覗のぞきこんだ時から、そう思わずにはいられなかつた。あの人は私を怖こわがつている。私を憎み、私を蔑さげすみながら、それでも猶なほ私を怖がつている。成程私が私自身を頼みにするのだったら、あの人が

必ず、来るとは云われないだろう。が、私はあの人を頼みにしている。あの人の利己心を頼みにしている。いや、利己心が起させる卑しい恐怖を頼みにしている。だから私はこう云われるのだ。あの人はきつと忍んで来るのに違いない。……

しかし私自身を頼みにする事の出来なくなつた私は、何と云うみじめな人間だろう。三年前の私は、私自身を、この私の美しさを、何よりもまた頼みにしていた。三年前と云うよりも、あるいはあの日までと云つた方が、もっとほんとうに近いかも知れない。あの日、伯母様の家の一間で、あの人と会つた時に、私はたった一目見たばかりで、あの人の中に映っている私の醜さを知つてしまった。あの中は何事もないような顔をして、いろいろ私を唆かそその

すような、やさしい語ことばをかけてくれる。が、一度自分の醜みにくさを知った女の心が、どうしてそんな語ことばに慰められよう。私はただ、口く惜やしかった。恐おそしかった。悲かなしかった。子供の時に乳母うばに抱かれて、月げつ蝕しよくを見た気味の悪さも、あの時の心もちに比べれば、どのくらいかもしれませんがわからない。私の持っていたさまざまな夢は、一度にどこかへ消えてしまう。後にはただ、雨のふる明け方のような寂しさが、じつと私の身のまわりを取り囲んでいるばかり——私はその寂しさに震ふるえながら、死んだも同様なこの体を、とうとうあの人に任せてしまった。愛してもいないあの人に、私を憎にくんでいる、私を蔑さげすんでいる、色好みなあの人に。——私は私の醜みにくさを見せつけられた、その寂しさに堪えなかつたのであろうか。

そうしてあの人の胸に顔を当てる、熱に浮かされたような一瞬間にすべてを欺こうとしたのであろうか。さもなければまた、あの  
 人同様、私もただ汚らわしい心もちに動かされていたのであろう  
 か。そう思っただけでも、私は恥しい。恥しい。恥しい。殊にあ  
 の人の腕を離れて、また自由な体に帰った時、どんなに私は私自  
 身を浅間あさましく思っただ事であろう。

私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思つても、止と  
 め度どなく涙が溢あふれて来た。けれども、それは何も、操みさおを破られた  
 と云う事だけが悲しかった訳ではない。操を破られながら、その  
 上にも卑いやしめられていると云う事が、丁度癩らいを病んだ犬のように、  
 憎まれながらも虐さいなまれていると云う事が、何よりも私には苦しか

った。そうしてそれから私は一体何をしていたのであろう。今になつて考えると、それも遠い昔の記憶のようにおぼろにしかわかわらない。ただ、すすり上げて泣いている間に、あの人の口くちひげが私の耳にさわつたと思うと、熱い息と一しよに低い声で、「渡を殺わたるそうではないか。」と云う語が、囁かれたのを覚えている。私はそれを聞くと同時に、未いまだに自分にもわからない、不思議に生いきいき々々した心もちになつた。生々した？　もし月の光が明いと云うのなら、それも生々した心もちであろう。が、それはどこまでも月の光の明さとは違ことばう、生々した心もちだつた。しかし私は、やはりこの恐こしい語ことばのために、慰められたのではなかつたらうか。ああ、私は、女と云うものは、自分の夫を殺してまでも、猶人に愛され

るのが嬉しく感ぜられるものなのだろうか。

私はその月夜の明さに似た、寂しい、生々した心もちで、またしばらく泣きつづけた。そうして？　そうして？　いつ、私は、

あの人の手引をして夫を討たせると云う約束を、結んでなどしまつたのであろう。しかしその約束を結ぶと一しよに、私は始めて夫の事を思出した。私は正直に始めてと云おう。それまでの私の心は、ただ、私の事を、辱め<sup>はずかし</sup>られた私の事を、一<sup>いち</sup>図<sup>ちず</sup>にじつと思つていた。それがこの時、夫の事を、あの内気<sup>うちき</sup>な夫の事を、——いや、夫の事ではない。私に何か云う時の、微笑した夫の顔を、ありあり眼の前に思い出した。私のもくろみ<sup>せつな</sup>が、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顔を思い出した刹那<sup>せつな</sup>の事であつたらう。何故と云

えば、その時に私はもう死ぬ覚悟をきめていた。そうしてまたきめる事の出来たのが嬉しかった。しかし泣き止んだ私が顔を上げて、あの人の方を眺めた時、そうしてそこに前の通り、あの人の心に映っている私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一度に消えてしまったような心もちがする。それは——私はまた、乳母と見た月蝕げつしよくの暗さを思い出してしまう。それはこの嬉しさの底に隠れている、さまざまの物の怪ものけを一時いちどきに放ったようなものだった。私が夫の身代りになると云う事は、果して夫を愛しているからだろうか。いや、いや、私はそう云う都合つごうの好い口実くちじの後うしろで、あの人に体を任かした私の罪つぐのの償いつぐなひをしようとする気を持っていた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の眼に私自身

を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはま  
 だ大目にも見られよう。私はもつと卑いやしかった。もつと、もつと  
 醜みにくかった。夫の身代りに立つと云う名もとの下で、私はあの人の憎し  
 みに、あの人の蔑さげすみに、そうしてあの人が私もてあそを弄もんだ、その邪よこしまな  
 情欲かたきに、仇かたきを取ろうとしていたではないか。それが証拠には、あ  
 の人の顔を見ると、あの月の光のような、不思議な生いきいき々いきしさも  
 消えてしまつて、ただ、悲しい心もちばかりが、たちまち私の心  
 を凍らせてしまう。私は夫のために死ぬのではない。私は私のた  
 めに死のうとする。私の心きずつを傷けられた口くち惜やしさと、私の体を汚  
 された恨めしさと、その二つのために死のうとする。ああ、私は  
 生き甲斐がいがなかつたばかりではない。死に甲斐さえもなかつたの

だ。

しかしその死甲斐のない死に方でさえ、生きているよりは、どのくらい望ましいかわからない。私は悲しいのを無理にほほ笑みながら、繰返してあの人と夫を殺す約束をした。感じの早いあの人は、そう云う私の語ことばから、もし万一約束を守らなかつた暁には、どんなことを私がしでかすか、大おお方推察のついた事であろう。して見れば、誓せいごん言ごんまでしたあの人が、忍んで来ないと云う筈はない。——あれは風の音であろうか——あの日以来の苦しい思が、今夜でやっと尽きるかと思えば、流石さすがに気の緩むような心もちもする。明日の日は、必ず、首のない私の死骸の上に、うすら寒い光を落すだろう。それを見たら、夫は——いや、夫の事は思うま

い、夫は私を愛している。けれど、私にはその愛を、どうしよう  
 と云う力もない。昔から私にはたった一人の男しか愛せなかつた。  
 そうしてその一人の男が、今夜私を殺しに来るのだ。この燈台の  
 光でさえそう云う私には晴れがましい。しかもその恋人に、さいな虐ま  
 れ果てている私には。」

けさ袈裟は、燈台の火を吹き消してしまふ。ほどなく、暗の中でか  
しとみすかに薨しとみを開く音。それと共にうすい月の光がさす。

(大正七年三月)





# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月23日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 袈裟と盛遠

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>